
View

藤夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

View

【コード】

N0508U

【作者名】

藤夜

【あらすじ】

文化委員。それが高校二年現在の僕、成沢悠斗なるさわゆうとの持つ唯一の肩書きだった。

この委員での『仕事』で僕は忘れられない出会いを果たすことになる。

これは、そうして出会った僕と、彼女と、僕の大切な人達皆で残した、かげがえのない思い出。

そのひとかけら。

序章 文化祭に向けて

気がつくと、僕は真っ暗な部屋の中にいた。明かり一つない空間なのに、僕にはなぜかそこが部屋であることがわかった。

……なんで僕こんなところにいるんだろう

それまでの記憶がまったくない。意味がわからない。何かを思い出そうにも、目が見えないのでヒントも何もない。

しかし闇に覆われた部屋は突然、目がくらむような光に包まれた。

う……眩しい……

閃光は断続的に弾けは消えて、消えては弾けを繰り返している。

……声…………？

ふと耳を澄ますと、遠くから声のような音が聞こえてきた。世界が白に覆われている間だけ、声は響いてくるようだ。そしてまた黒に染まるにしたがって、声も少しずつ消えていく。何を言っているのかはわからなかった。けれど、酷く切実な想いのようなものを感じる。

誰かを呼ぶような

何かを訴えるような

誰かに、何かに……赦しを請うような

……誰？

僕は声の主を探すけれども、光と闇に目がやられてまともに見え

ない。

……何？……何を、言って……？

しだいに光が強くなっている。それにしたがって声もだんだん近づいてくる。

僕は必死で耳を傾け、声の主が何を言っているのか確かめようとした。

やがて聞こえてきたのは……。

「起きなさい悠斗。陽くん、迎えに来たわよー。」

「……んあ」

ありていにいうのなら、そこで目が覚めた、だ。

いまの……夢、だったんだ……。やけに現実味のある夢だったけど。……心なしか目の奥が痛い。

「早く行きなさいー。友達待たせちゃ悪いでしょー？」

ああ、陽が来てるんだっけ……。ぼーっとしながら時計の方を見やる。

5月2日、AM08:00……へ？もう8時？！

僕はすぐさま跳び起きて毛布を払いのけ壁に掛けた制服をひつつかみ階段を駆け降りる。「朝から忙しない子ねえ……ふああ」眠たそうな母さんを横目に洗面所にダッシュ。顔を洗い、寝癖を直し、着替えを済ませる。

ここまでに要した時間実に数十秒。（これは僕の特殊スキルだ、そこ、不潔とか言わない）

「いつてきますっ！」

「いつてらっしゃあい」やる気のない声を背にドアを開け、外にいた男に目をやり……

「おはよう、ハルくん。今日は一段と可愛いね。」

勢いよくドアを閉めた。

「あら、どうしたの？忘れ物？」

不思議そうに首を傾げる母さん。

「違うよ母さん……忘れ物をしたというならそれはむしろ扉の向こうにいる変態だと思うんだ。」

常識というものをまるごとどこかに置いてしまっただらしい。

「なんか誰かが外からドアを叩いてるみたいだけど……陽くんじゃないの？」

「ゴメン母さん……ちょっと気分が悪くなってきた。今日、休むよ……」

「嘘おっしゃい。またそんなこと言って……もうずる休みはしないって、約束したでしょ？」

うつ、なんだかズレた方向に勘違いされてるような。

まあそりゃあ幾度となく僕の演技を見てきた人だ。この程度の嘘は見抜かれて当然か。……気持悪くなったのはほんとなんだけどな。

「……わかったよ。いつてきます」

再びドアノブに手を掛け、おそろおそろ外を覗く。

……すると、僕の視界に変態の顔面がドアアップで飛び込んできた。

「うおっ！何やってんだテメエは！！！」

我慢の限界に達した僕は開けた扉を奴の顔面めがけてクリーンヒットさせた。

「つてえ？！それが毎朝あしげく自宅まで迎えに来てる親友に対する仕打ちか！！鬼か？！」

鬼畜野郎はお前の方だと言いつてやりたいね。

……不本意ながら紹介しよう。

いま僕の目の前で額を抑えながら悶えている男は僕のクラスメイ卜、雪村陽だ。切れ長の目に茶髪のツンツンした頭髪のせいで非常にイカつい印象があるが……こいつには変態が変態たる所以があっ

て……

「朝一の挨拶にギャルゲー主人公の台詞を吐くような痛々しい親友をもった覚えはない！」

とおもっ。

「ったく、うるせえよ寝坊したくせに……ちよつとしたジョーダンだよジョーダン。何マジで引いちゃってんの？」

とまあ……超のつくほどのギャルゲーマーで度々訳のわからない主人公ごっこを始める。(今回ののはとび抜けて意味がわからない)登場シーンの爽やかな(キモいけど)笑顔はどこへやら、いつものがさつな雰囲気元通り。というより、さつき何気に逆ギレしなかつた?コイツ。

「オマエさ……そういうの僕にやってて楽しい?いまの明らかに女を口説くセリフだね……。それともあれか?ついにお前もそういう趣味を?!」

「違えよ?!ちよつと待て距離を置くな冗談だつて!あんまりお前が遅いんで、ちよつとからかってやろうと……だから待て素で反応するなよ!俺が恥ずかしい奴みたいじゃん!!」

まさかいままで気づかなかつたというのだろうか……?バカの思考は本当理解に苦しむ。

まあ、とりあえず先の妄言は本当にただのおふざけらしい。(冗談でなければ僕が困る)

「そういう冗談なら捺芽にやりやいいじゃん。案外本気になったりして」「……嫌だね。捺芽にやつたら蹴飛ばされる決まっついてえ?!」

蹴つ飛ばしてやった。僕なら手を出さないと思ったら大間違いだ。「ったくもうわかつたから行くよ……ってバカの相手してたらもう残り10分?!」

僕たちの通う高校は自転車で片道20分ほどの距離にある。つまり現状、いつもの倍頑張っても間に合うかどうかというところだ。

「俺のせい?!もとはといえばお前の寝坊が悪いんじゃない?」

文句を言いながら自転車にキーを差し込む陽。お互いこれ以上無駄口を叩いている時間はない。タイムリミットは10分。ちなみに僕らの最短記録は12分。指導を免れるには、新記録をたたき出す必要がある。「行くぜハルくん。俺達の限界を超えてやろう!!」「任せる陽。ハルくん言うな」かくして僕たちのデッドレースが幕を開けた。

結果、14分08秒……馬鹿なつ。僕達の限界はこの程度か?!生徒指導の先生(ちなみに僕達の担任)に一言詫びを入れ、中へ入れてもらった僕達。放課後たかだが数十分のお小言を頂いただけなのだがなんともやるせない気分になる。

二人して暗鬱な気持ちで階段を昇り、2 Aの札が着いた教室に入る。

「どうしたの、あんた達?えらく遅かったみたいだけど…何かあったの?」

教室に足を踏み入れるや否やおさげを揺らして声をかけてくる女子生徒。こいつは姫野捺芽。先程の会話でも少し名を出した人物だ。衣更えの初日から半袖ですらつとした健康的な手足をさらしていて、その快活な印象に違わず運動能力は高い。さらには成績も良く、人あたりもよいというまさに完璧人間だ。

それゆえクラスの女子大半の推薦によりクラス委員長決めは即決であったという。

ちなみに僕、陽とこの捺芽の三人は小学生以来の腐れ縁だ。

「いやあ……とくに何も、単に悠斗が寝」

「コイツにセクハラされたんで通報してたんだ」

変態が言い訳をしようとしたので僕は間髪入れずに真実を告げてやった。

「うおい！！嘘つくんじゃねえよ！あれは全部お前の責任だ！俺は断じて悪くねえ！！」

見苦しい嘘をついてまで他人を売るとはなんという奴だ。変態の上に虚言癖まであるとは……もう駄目だなコイツ。

その様子を見ていた捺芽が呆れたように言う。

「来て早々元気だねあんたら……。大方、ハルがもたもたしてるから陽が寂しくなっちゃってバカやってたつてとこだろうけど」

僕達の醜い言い争いでここまで見抜いたのはさすが幼なじみといえよう。

「……まあそんなとこ、かな？」

僕は陽だけの責任だと信じて疑わないが。

……だってこいつ、ほんとに気持ち悪かったんだもん。

「でもさーハル。あんた放課後は委員会のの仕事があるんじゃないか。つたつけ？放課後に説教なんか食らってたらそつちどうすんの？」

あちゃあ……。そういや今日だったつかけ。参ったな……。つて待てよ、そういうことなら。

「なんならあたしがかわりに行ってきてあげよつか？どうせあたしもクラス委員の仕事あるし」

さすがはクラスの長。なんとという親切な心遣い。だがいまは……

「いいや、いいよ。今日は文化祭用の機材や道具を運んだりする仕事だから。か弱い捺芽にそんな重労働を任せるのも心苦しい」

僕はなるべく純心な雰囲気を漂わせこつ言った。

「ええと、そう？」

なぜか捺芽はどことなくうれしそうだ。よしよし計画どお……

「……とかいいながら、それを理由に説教から逃げ出したいだけだろーが。苦しいのはテーマの言い訳だよばーか（笑）」

「ンだとゴルア?!」

コイツめっ！なんと余計なことをつ。

「大体捺芽相手に力仕事させるのを躊躇するわけないじゃん？ハ、か弱い？誰かを殴る、蹴る以外に無駄な馬鹿力を役立たせるいい機

かブフオウ?!」

鬼のパンチが愚者の腹をブチ抜いた。

コイツめ。ホントに余計なことを……。

無防備な腹に穿たれた拳は相当な威力だったようで、床に崩れ落ちた陽はピクリとも動かなかった。……今回は少し同情したよ。

「ちよつと……このバカが言ったことは……事実?」

ヒイイ!怒りの矛先がこちらに向いている?!あいつめ、起きたら覚えてろ……。

「い、いや確かにそういう見方もあるかもだけど僕が行かなきゃって思ったのは、ホントで!捺芽の代わってくれっていう優しい心遣いも、凄くうれしかったなーうん!でも、捺芽はホントか弱い女の子なんだからっ、ここは僕に任せて!ね?」

思い付く限りの言いわ……もといフオローを並べる。バカの二の舞になりたくない一心で、少々おかしなことを口走った気もするが。「ふ、ふうん。……そんなふうに見てくれてたんだ」

「なにか言いました?」

「いかん無意識に敬語が。」

「え?い、いやいやなんでもないなんてでもない。まあ、あたしがいてもかえって邪魔になっちゃうかもしないわね。七海ちゃんのことを考えると、できることなら一年越しのあんたがいたほうがやりやすいだろうし」

必死の弁明が功を成したようだ。

どうやら矛はバカを串刺しにしたところでひとまず落とし所をつけたらしい。

ところで、捺目がさっき言った七海ちゃんというのはお隣りB組の文化委員に所属する女の子だ。僕は一応去年から面識がある。

「彼女、ただでさえ人見知りか激しいのに今年から委員長を任されて、まだ仕事に慣れてないと思うのよね……。あんたは、去年から一緒に気心も知れてるでしょ?行ってしっかり支えてやんなさい」

こういう気配りが自然にできてしまうあたりが僕のような凡人との決定的な違いだなと素直に思う。

とは言われても、あの子とまともに会話を始めたのもほんの数ヶ月前だし、そんなにサポートできる自信はないんだけどね……。

これ以上わざわざ捺芽様を刺激するのもアレなのでここは素直にハイと言っておこう。

「任せて！！男成沢、バッチリサポートして来ますよ！！」

「はいはい。っとそろそろ先生が来るころだね。さっさと伸びてるバカ片付けないと」

捺芽は慣れた手つきで白目を向いて倒れている陽を奴の机までひきずっていく。

意識がないまま席につかされた陽は座らされた勢いでぐでんと机につつぶした形になってしまっている。

……ほんとうに生きているのだろうか。

捺芽がバカの亡きがらを処理し自分も席についたころ、ちょうど剣呑な雰囲気醸し出した女教師がが教室に入ってきた。

「おはようみんな。出席をとる……前に起きる雪村ア！！」

ヒュバツ、という音を立て出席簿が空を切り、バカの後頭部に直撃した。

「ツたあ？！ハツ！！いままで俺は何を……」

ガバツと飛び起きてあたりを見渡す陽。そしてその目が教壇の担任を捕らえたとき、なんとなくマズイ状況を察したようだ。一気に顔が青ざめる。

「遅刻したうえ私の前でさっそく居眠りとは…大層な御身分だなあ雪村？」

「待って先生……ご、誤解だつて！これは寝てたんじゃなくて意識を……」

「言い訳無用！！本日放課後、生徒指導室では覚悟している！！」

たった数分で女の逆鱗に二度も触れるとは、厄日だなあいつ。改めて同情するよ。

「待つて先生！成沢くんも一緒に連行してください！通算の遅刻回数ならコイツのほうが多いっス！」

前言撤回、もはや同情の余地はない。

「それとこれとは話は別だ馬鹿者！！！」

「そりゃあそうなるでしょうよ……。」

そんなぐ、と脱力して嘆く陽を無視して、僕達の担任こと五十嵐緋李先生は連絡事項を伝える。

「……以上だ。何か質問等があれば、この後私のところに聞きにくい。では、委員長」

捺芽の礼、という掛け声に続き皆深々と一礼。若干一名うなだれていただけのようにも見えるが。

僕は教室を出た先生を追いかけ五十嵐先生、と呼び止めた。

「成沢か。お前も今日はちゃんと指導室へ来るように。言い訳ならきかんぞ？」

「すみません先生……そのことなんですけど、できれば指導を別の日にずらしてもらえませんか……？今日の放課後に文化委員の集会があつて、人手が要るらしいんです。遅刻をしておいて勝手なことを言っているとは思いますが、できればお願いします」

僕は必死に頭を下げた。もはや説教から免れたいという目的は念頭にはなかった。

そもそも今日一日免れたとしても結局いつかは説教されなきゃいけないんだから同じことだ。（じゃあなんで最初は委員を口実に逃げようかと思つてたかつて？それが青春というものだ。）

「そういえばお前は文化委員に所属していたな、ふむ……いいだろう。明日は休日だったか、なら指導は明後日の朝にしよう」

先生は腕を組み少し考えてから、こう答えてくれた。

「ほんとですか……?!」

思つたよりもすんなり認めてもらえて正直驚いた。

五十嵐先生は人並み以上にルールや決まりごとにシビアな人だ。

なので僕もそれなりに粘る覚悟をしていたのだが……。

「嘘を言っただろう。」

正当な理由があるのなら認めてもよからう。そのかわり、当日は絶対に遅れるんじゃないぞ、もし遅れたときは……わかっていない？」

さりげない忠告にもかなりの迫力を感じる。

僕が内心ビクビクしていると先生は「それにだ」と続けた。

「お前が誰かを助けるために、ここに残りたいたと言ったことが嬉しくもあってな。変わったんだな、お前」

なんだか芝居がかった話し方の気がするが先生はいつもこんな力強いのでさして気にしない。

けれども、自分でも去年の僕といまの僕は別人のように見えると思う。

詳しいことは長くなるのでいまは置くが、去年の僕は間違ってもさっきのような台詞を吐くような人間ではなかった。

「今年からは少しでも、自分より周りを気遣えるようになりたいと思う」

文面だけ見れば大層なセリフだが昔のヘタレな僕は、いま目の前に現れたら殴り倒したくなるほど甘ったるい奴だった。

……甘くて、その責任を誰か押し付けて、気取って、ただただ情けない奴だった。

そんな情けない僕を見捨てずに、ここまで導いてくれた人達に、敬意を払うのは当然のことだと思う。

「そうか、それはいい心構えだ。しっかり出席して、友好の輪を広めてくるといい」

「やっぱりオーバーな言い方だ、と内心思いながらも僕は力強く「ハイ」と答えた。

全ての授業が終わり、ホームルームを終えた僕はすぐさま教室を出た。

集合時間までまだ時間はあるのでそこまで急ぐこともないのだが、現在部活動に所属しない僕はこんなことでもないと放課後残ることなんてないので少しワクワクしてしまう。(指導や居残り授業は別) まあそんな気持ちも去年はまったく感じなかったわけだが……。集合場所である美術室は僕らの教室のちょうど向かい側の南棟にある。

「あつ、成沢くん。こんにちはー」 教室を出ると間もなく、背後から柔らかい挨拶を受けて振り返る。そこには我らが文化委員長、杉崎七海が立っていた。「ああ杉崎さん。こんにちは」

僕もできるかぎり穏やかな声で挨拶を返す。

淡くブロンドがかかったセミロングの髪に性格を形にしたようなおっとりした瞳。

僕は彼女の独特の柔らかい雰囲気割と好きだ。

なんだ、捺芽があんな話をして心配してたけど……いつもどおりふわふわしてるし全然大丈夫そうじゃないか。

「いまから美術室に行くところだよ。ならいっしょにいこ？」

杉崎さんは人懐っこい笑みを浮かべて僕の横に並んで歩き始めた。「聞いたよ成沢くん、今朝は遅刻しちゃったんだって？五十嵐先生のお咎めはなかったの？」

「文化委員の仕事行きますって言ったら、以外にあっさりでき。どちらにせよ、明日出頭しなきゃいけないんだけどね」

僕はありのままあったことを話した。

「あの五十嵐先生がそれだけの理由で見逃してくれたの？珍しいこともあるものだね」

この反応からしていつもの先生の厳格さが感じられるだろう。

「ほんとにね。ところで杉崎さん、今日は委員長になってはじめての集会だけどどんな調子？」

さりげなく一応心配な点を尋ねておく。すると彼女は

「……え……？……うんっ、だ、大丈夫！」 しばらく固まった後に元気よくガッツポーズ。

……ああ、これは悪いことをした。必死に忘れようとしていたのを思いださせてしまったようだ。

「えっと……あんまり気負わないほうがいいと思うよ？杉崎さん」

「大丈夫だよ！全然。き、緊張なんてっしてないからっ！！」

ここまでわかりやすい嘘もそうないな……。

まあこのためにわざわざ捺芽に警告までされたのだ。

「してないならいいんだけど……知らない人の前に立って話するのっつて、僕は大変だと思ったんだ。もし、何か困ったらいつでも僕を頼りにしてくれていいから」

あんまり頼りになんないけどねと心の中だけで呟く。

「成沢くん……。うんっ」これで少しでも彼女の気持が解れてくれれば幸いだ。杉崎さんには、捺芽との話を置いても、個人的に恩がある。できることなら力になってあげたい。

とりあえず話が落ち着いたところで美術室に着いた。

既に何人かは席についていて、知らない顔、つまりは新入生もちらほら見える。時間にはまだまだ余裕があるのに……なんとも優秀な子達だなあ。いつかの誰かにも見せてやりたい。

さてじゃあ僕も座ろうと部屋の後ろの特等席に向かおうとすると不意にきゅっ、と制服の袖を摘まれた。

振り返ると杉崎さんが震えながらいまにも泣き出しそうな顔で僕を見ていた。さっそくですか……。

「だ、大丈夫だよ杉崎さん。はじめてで緊張してるのは一年生も同じだし……僕みたいに一年越しの2年生もくるかもしれないし」

というより……こんな状態の彼女を前に言ってしまうのもなんだが、たかだか委員会の取締でここまで緊張するのはどうかと思う。

極度の恥ずかしがり屋といっても限度があるのでは。

「成沢くん……。でも、わたし……大勢の人の前じゃ頭真っ白になっちゃうし……。皆の前でただ慌てる自分を思い浮かべたら……恥ずかしくて……」

大勢っつて、数十人ほどだけどね……。

けれども……人の前に立って、言わなければいけないことが出てこなくて、更に焦ってどんどん答えが出てこなくなる、ということ……度合いに差はあれど多くの人が経験するシチュエーションではないだろうか。……仕方ない。

そこで僕は、いつもは目立たない後ろの方の席に座るのだが、一番前の席の杉崎さんの近くに座ることにした。

「できるかどうかわからないけど、僕もフォローするようにしてみるから……ね？」

「成沢くん……。……うん」

イマイチ自信なさげに杉崎さんは頷く。これは捺芽の懸念はもつともだつたといまにして思う。

とかなんとか言っているうちに、美術室には大半の生徒が集まっているようだ。時計を見ると、針はほぼ集合時間ピッタリを指していた。

「そろそろ時間だよ。力を抜いて、がんばれ」

「……うん、ありがとう」

教卓の前に立ち黒板に今日の流れを書き始める杉崎さん。そして書き終わると、こちらに向き直り力一杯言い放った。

「……お、おはようございます！」

……現在時刻15時30分。今日一日中ふて寝していた陽あたりには適切な挨拶かもしれないが、残念ながらここにいる人々には当て嵌まらないらしい……。皆怪訝な顔をしている。

……というか僕には出会い頭にこんにちはって言ってたよね？

「間違えた……。ああ……。えと、今日は、来月の文化祭に向けての説明の準備……。違った……。さいの……。準備の説明を、じゃなくて……。完全にテンパってしまっているらしい。言いたいことはなんとなくわかるんだけど、台詞が頭の中でこんがらがって正しい文章を作り出せないようだ。」

(頑張れ、杉崎さん……)

僕が心の中でそう呟くと彼女も泣きそうな顔で僕の方を見てきた。

なので僕は「気にせずに」という意味をこめて笑って肩を竦めた。それを見た杉崎さんは一度頷いてから深呼吸をしたあと、再び皆に向き直り話し始めた。

「……ええと、今日は…来月の文化祭に向けての準備を皆さんにやっってもらいます。いまから皆さんの役割を説明しますのでその後、各自準備作業に取り掛かってください。まずはA班……」　そこからは特に慌てることもなく、ゆっくりと、けれどハッキリ杉崎さんはと説明を進めていった。

そして一通り説明が終わると、皆指示の通りに持ち場に向かった。「うわあああ〜！死ぬほど恥ずかしかったよー！！」

教壇を降りるや否や杉崎さんは真っ赤になった顔を両手で隠しながら悶えていた。

「お疲れ様、とりあえずは一つ仕事が終わったね」

このあとの彼女の仕事は、ここ美術室に残って文化祭の出し物について検討するというものだ。

そして各自の仕事が終わったかの確認もしなければいけないので必然的に終わるのが一番最後ということになる。

「僕はいまから倉庫に機材を突っ込んでこなきゃいけないから……

じゃあ、行くね」

「うん。ほんとに……ありがとう、成沢くん」

礼を言われるようなことをした覚えはないのだが、とりあえず「どういたしまして」と返しておく。

さて……僕も自分の持ち場に向かいますか。

「そうだ、成沢くん！今日終わったら話したいことがあるから！！」
僕が美術室を出ようとするとなんか声をかけられた。……なんだろっ話っつて。

もしかしてもしかすると？ってまさかね……。

「ふうっ…これで最後か」

職員室のとなりにある倉庫に抱えたダンボール箱を置いて、僕は息をついた。

さすがに疲れた……アンプがあんなに重いなんて聞いてないよ。

「結構力入れてるよなあウチの文化祭……つとお疲れー」

僕に数秒遅れて、残りの機材を運んでくる一年生。これで僕達の持ち場の仕事は完全に終了。

思ったより時間がかかってしまったようでもう5時を大分過ぎていた。一年生は「お疲れ様でした」と軽く僕に会釈をすると、南棟に向かって歩いていった。

礼儀正しい子だ。逆の立場なら絶対に無視した自信があるね。

さてと……任務完了の報告もあるし、ボスのところへ向かうとしますかね。誰もいない廊下の窓から……やはり誰もいない教室を眺めながら歩く。

こうしといると、学校には自分以外の人間がいないかのような錯覚を覚える。実際には杉崎さんが美術室にいるし、耳を澄ませばどこからか、微かにプラスチックの演奏も聞こえてくるのだから、そんなわけではないのはすぐにでもわかるんだけど、不思議とそんな気分になつてしまう。

そういえば、機材運び込みの前に何か伝えたいことがあるようなこと、杉崎さん言ってたな……なんだろう？

それが気になつたせいか、無意識に早足になり、階段は2つとばしで上がっていて、気がついたら美術室の前まで来ていた。

「いま戻ったよ」扉を開けるとそこには予想してた通り杉崎さんが机に広げた書類を黙々と読んでいる光景を目にした。ほんと、真面目だよなあこの人は。

「あつ、お疲れ様ー。成沢くんが最後だよ。」

僕より先にここに戻った一年生はさっさと帰ったらしい。

ということ僕たちはいま……

「……えと……なんか久しぶりだね、二人きりで話するの」
静まりかえった中、急に言われたのでドキっとしてしまった。

いや、心の中で思ってたことを言い当てられたってのもあるけど、女の子に二人きりを意識されてときまぎしない男がいるならば連れてきてほしい。僕がそいつから男の称号を剥奪してやる。

「う、うん……そーだね……」 い、いやでも落ち着け成沢悠斗。
お前が頭の中で『もし』と思い浮かべたソレ。それはありえない。
現実的になれよな成沢クン。

必死に自分に言い聞かせようとするが、夢と希望を捨てられない
男成沢は『でもさ、もし……』を繰り返してばかり……。

現実を見ようとする僕と、男成沢がiグループを展開しているうちに、杉崎のほうから声をかけてきた。

「あのね？お仕事が始まる前に言ってたことなだけどね……？」

おそろおそろ、といった風に彼女は話し出す。窓から差し込む

西日のせいか、どことなく頬が朱に染まっているような……。

「う、うん……」 相槌を打って彼女の言葉を待つ。

「……こんなこと、私が言うのも変だし、迷惑だったらごめんね？
実は……」

そして、彼女は真意を告げた

「文化委員の仕事で写真を撮ってきてもらいたいの」

…… ああー、まあこんなオチか。当然当然。うん、何にも期待なんてしてなかったんだからね！勘違いしないでよね！男成沢？何ソレ食えんの？

「あのっ、そのっ……気悪くしてたらごめんねっ！わたしってば空気読めないから……」

僕の残念そうな表情をどう解釈したのか杉崎さんは突然一方的謝りはじめた。

「全然気を悪くなんてしないよ？けどさ……まず言ってる意味がわ

からないよ。写真って？何を撮るの？それに、どうして僕に頼んだの？」

まったくもって彼女の言いたいことがわからない僕は、矢継ぎ早に質問した。

「えと、それは……成沢くんが……写真撮るの好きだったかなあ〜って……元写真部だし……」

杉崎さんの申し訳なさそうな態度から大体それはわかっていた。

黒歴史の中の僕は、確かに写真部に所属していた。だからこそ彼女も歯切れが悪かったのだろう。しかし辞めた。なのになぜ僕なんだ？

「写真撮らせるなら、写真部に任せればいいんじゃない？普通」

「それは……そうなんだけど、写真部の人もいろいろ忙しいみたいだし……もしこれがきっかけに……成沢くんが写真に興味を持ち直せばな〜って……」なるほど。言いたいことはわかった。そして誰がそれを言いたがっているかもわかった。

「白鳥だね？」

「……うん」

長い沈黙の後、彼女は首肯した。

まさかここであの人の名前が出てくるとは……。

「……えつとね、一応、白鳥くんから伝言を受けてるの。『やあナルシイ。元気かい？』」

どうして僕の周りに挨拶すらまともにできない人が多いんだろう……。

「『君が部を辞めてから半年以上経つ。僕は何度も君に我が部への帰還を要求したが、君はいつこうに承諾しない！ならば僕にも考えがある！……』」

なんだこの追い詰められしょぼい悪役みたいなセリフ。

「『聞くところによれば文化委員にて、写真を撮ってアルバムを制作するという企画があるそうでないか。本来なら我々写真部が請け負うところなのだが……今回その任務を、君に与える！……』』……そうして写真を撮っている間に、我々との青春の日々を思い出し、再

入部しようと思いきや直ちに違くない!!」

「そんなわけないだろ……随分おめでたい頭してたんだなあの人……。そして杉崎さん、演技に熱入りすぎ。」

「このミッシヨンは強制参加だ。もしも部に戻る気になったら、直ちに白鳥の元へ馳せ参じたまへ。P・S・君には才能はないが、君がいないと張り合いがない。色よい返事を期待している」

「……今度会ったら殴り倒そうかなあのナルシスト。」

「……ということなんだけど……。わたしも、できればまた成沢くんの写真撮るとこ見てみたいなって思って、こんなこといったんだけど……。やっぱり迷惑、かな……? 白鳥くんは強制参加って言うんだけど、無理はしなくていいからっ」

「こつこついう風に言ってもらえることは、正直とても嬉しい。」

白鳥は言い回しこそイライラしたが、あそこまで僕の事を思ってくれた部員は間違いなくないだろう。

「本当なら……その気持ちには答えたかった。けど……」

「やっぱり僕には無理だよ。ごめんね、杉崎さん」

「そんな、謝ることじゃないよつ。こちらこそ急に变なこと言っごめんね?」 杉崎さんは一瞬しゅんとして、それからまたいつもの笑顔を浮かべた。

「それで……僕は何の写真を撮ってくればいいのかかな?」

「……へ? 成沢くん、アルバム作り手伝ってくれるの?!」

再入部の話とこの話は別の問題だ。放課後なら大抵暇だし、彼女きつてのお願いなら、断るわけにはいかない。(ついでに白鳥も)

「ありがとうつ。嬉しいなあ……。でも長くなりそうだから、時間も時間だし、今度会ったときに改めて説明するね」

外を見るともう日が沈みかけて暗くなり始めていた。

「わかった。じゃあ、今日はもう帰ろうか」 与えられた仕事の内容がよくわからないのは気掛かりだったが、正直なところ僕も疲れていたので追い追いかければいいかと思っただ。

「そうだね、校門まで一緒に行こうか？」

僕は頷き、杉崎さんが書類を集めている間に戸締まりを済ませた。そして二人で校門まで辿り着いたとき、不意に後ろから声がかかった。

「おーい……待てよオその地味野郎……。人が限界まで絞られている間に何女侍らしてんだウマウマしてんだこんちくしょー!!」

「ほんとに大丈夫杉崎さん？暗くなると危ないからよければ送っていくけど」

「う、うん大丈夫つ。だけどその……雪村くん、無視しちゃかわいそうじゃ……」僕は本気で杉崎さんの道中を心配しているのだ。

アホの一人舞台にわざわざ上がる必要はない。

「そのとーりだ春人オー……。いわれのない罪でこんな時間まで監禁された拳げ句、リア充のノロケを見せつけられたオレの気持ちが悪くてメエわかるかア?!」

言いながら突然、陽はゾンビのように僕の体に纏わり付き始めた。「うわつ、やめる気持ち悪いっ!! やっぱオマエそつちの気が?!」「うるせえつ、お前こそなつちまえ!! 女に興味が持てない体になつちまえエ!!」

どこぞの魔人の如く陽は「ホモになつちやえ」と繰り返しながら僕から離れようとしないう。何この人ほんとに気持ち悪いんですけど?!!

「やっぱりそういう関係だったの?……ぐすつ。えと、……またねっ!成沢くん!ごゆっくり!!」

杉崎さんは赤くなりながら、怖い物見たような様子で僕らの帰宅路と逆方向に去っていった。(ちよつと涙目)

「……へ?ちよつと待って杉崎さん?!誤解だアー!!」

叫び声も虚しく、杉崎さんは戻ってくることはなかった。

一方誤解を生んだ張本人は少し前から僕の体から離れ、しばらくきよとんとした顔でその様子を眺めていたが……やがて達成感に満ちた顔でこう言った。

「ザマー」

ドスッ！！！！

見よう見真似のボディブローが炸裂した音だ。

チツ、無駄にいい腹筋しやがって……。今度捺芽に上手いやり方を教えてもらおう。

「たくつ、くだらないこと言ってんじやないっての……。いいから帰るよ」

「り、了解つす……」

今度杉崎さんに会ったときなんて言えばいいかなあ……。などと考えながら自転車を押して校門を出ると、僕の目の前を一人の女の子走り去って行った。あれ……。いまの……？

僕が引っ掛かりを覚えて走り去る女の子の背中を眺めていると、不思議そうに陽が尋ねてきた。「なんだ春人、知り合いか？ すごい勢いで走ってつたから、俺は顔はよく見えなかったんだが……。俺も知ってる人か？ 美少女かつ？！」

「いや……。どうだろう？ 僕もよく見えなかったから……。でも、ひよつとしたら知ってる人なのかも……。」二つ目の質問は敢えてスルー。

しかし顔もよく見えなかったのに……。どうして知ってる人なのかも、とか考えたのだろうか？

なんだか、最近似たような人を見たような気がするんだよね……。「ふうん。まあ勘違いかあるいは、どっかですれ違ってたまたま印象に残っただけ、ってこともあるだろうよ。仮に知り合いで美少女だったらなら紹介よろしくっ」

爽やかに親指を突き立てて言うがやはりこれもスルー。

でも、そうだよな。僕らの住む町は狭い。どこかで会っていたとしても、全然不思議はない。

その日、そう思い直し家路を辿り帰宅したあと、風呂に入るころにはその子のことなどすっかり忘れていた。

夜ベッドに入る頃には、杉崎さんの誤解をどう解くべきか……それだけを考えて眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0508u/>

View

2011年8月4日03時27分発行